

<成木の発展3 青梅の織物2>



前回の青梅縞の話の中で「明治時代中期になると急速に生産量が減少し、夜具地へと転換していく」と書きましたが、青梅縞が売れなくなってきたため、経費を減らそうとした結果、製品の質の低下により取引先からの信頼がなくなっていく。そこで青梅織物同業組合が結成され、品質の向上と夜具地への転換が行われました。

手作業から機械生産へ

青梅地区の織物は、前回紹介した「居座機(いざりばた)」から「高機(たかばた)」になり、明治時代後半になると動力として水力を使う織機が導入され、電気が使えるようになると電気織機へ移行していき、織物産業が発展していきます。

染色・柄の変化

夜具地には縞夜具と模様夜具の二通りの柄があります。縞夜具は先に糸を染めます。織屋から注文を受けて染色専門の業者が染めていました。(染色の設備をもった織屋もあったそうです) また、模様夜具は一度仮織して染めてからもう一度織る「ほぐし捺染(なっせん)」をしていました。その後、整経した糸をロールでプリントしていく「ロール捺染」へ変化していきます。

私の住んでいた八丈島には「黄八丈」という織物がありますが、織屋が染屋に色を注文してから織るところは同じシステムなんですね。

「ガチャマン」って聞いたことありますか？

昭和22年(1947)からの10年ほどが、青梅の織物産業で一番景気の良かったころです。

「ガチャン」と織機が動けば「万」の金が入ることを評して「ガチャマン」と言っていました。

当時の会社員は月給が5千円ぐらいだったそうですが、織機1台で月1万円の収入があったそうです。

成木の織物業

成木にも織物工場と染色工場がありました。実は私の母の実家も元は織屋をしていました。私が子供の頃はすでに夜具地ではなく塩化ビニール製のネットを作っていたので、実際に夜具地を作っているところは見えていません。

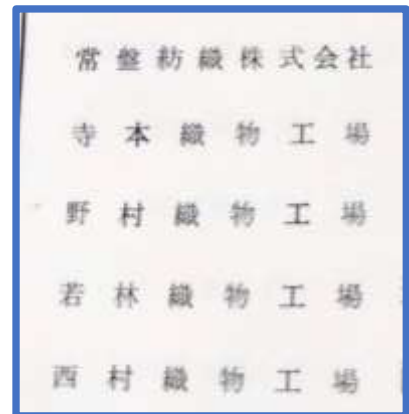
織屋の名残としては、鋸(のこぎり)屋根の工場の中に機械織機が並び、一日中「ガチャ、ガチャ」と激しい音がしていたことや、母屋の二階が40畳はありそうな大部屋があり、女工さんたちが住んでいたと聞いています。

調べた範囲では、昭和33年(1958)で織物工場が上成木3件、下成木2件あり、染色工場は上成木3件、下成木1件存在していたようです。

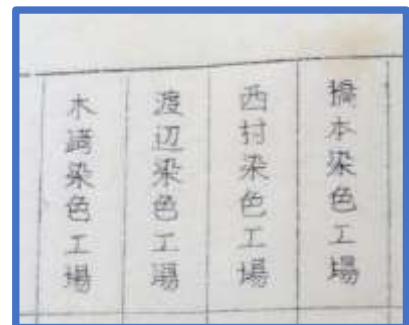
成木の山に機械の音が鳴り響いて、今のように静かではなかったかもしれません。

【出典】青梅市史 1995 青梅縞から青梅夜具地へ 2013

【取材協力】鈴木 和子 【監修】青梅夜具地 夕日色の会



成木の織物工場



成木の染色工場